

2018年(平成30年)6月22日



病院長からの一言 元気があれば…

弘前大学医学部
附属病院長 福田 眞作



最近、病院内に若い先生が増えたように感じるのは私だけでしょうか？直近(平成30年5月)の附属病院の医員数は110名

(契約職員105名、パートタイム職員5名)です。他の大学病院と比べればまだまだ少ないですが、一時、79名(平成29年1

月)まで落ち込んだ頃に比べると確実に増えています。色々な要因が考えられますが、初期研修後の新専門医制度がスタートした今年度に、大学病院のプログラムを選択する若い先生が増えたことも要因のひとつです。AO入試制度を導入したのが平成21年度であり、「いわゆる地域枠生」の多くが大学病院の各診療科に所属し、専門研修をスタートさせたことが影響しているように思います。新専門医制度の開始に当たり懸念されていた地域医療への影響(関連施設の医師の削減など)について

は、青森県の場合には大きな問題はないようです。各診療科の多くなる配慮によるところが大きいと思われる。

若干ではありますが、医師不足解消の兆しがみえてきたことはとても嬉しいことです(診療科によりますが)。該当する診療科長に、気のせいでしょうか？と感じられるのは私だけでしょうか。若い教室員が増えた診療科は、物静かだった教室が笑顔と活気にあふれており、そういった診療科は臨床実習にくる医学生にとっても魅力的に映るようです。是非、こ

の流れが各診療科へそして次年度以降も続くことを期待したいものです。

私の教室員(消化器内科)が、「元気が一番、元気があれば何でもできる(某元レスラー)」というとても分かりやすい名言をよく口にします。「すべての教職員が笑顔で元気であれば、我が附属病院は何でもできる…」と皆さんも考えてみてください。とはいっても、一人ではなかなか笑顔で元気にはなれないものです。周りの皆さんと一緒に笑顔と元気、どうぞ宜しくお願いいたします。

がんゲノム医療連携病院に指定

この4月、全国に11の「がんゲノム医療中核拠点病院」が指定され、その一つである東北大学病院との連携の下、本院は4月1日付で「がんゲノム医療連携病院」の指定を受けました。

がんゲノム医療提供体制の構築については、厚生労働省の「がんゲノム医療推進コンソーシアム懇談会報告書」において、「がんゲノム医療の提供に必要な機能を有し、がんゲノム医療の中核を担う『がんゲノム医療中核拠点病院(仮称)』を整備し、当該医療機関においてがんゲノム医療を提供することが適切である」旨が報告されました。そして、種々の検討会やワーキンググループの報告を受け、「がんゲノム医療中核拠点病院等の指定に関する検討会」において、「がんゲノム医療中核拠点病院」を選定、その後指定されたものです。

がんゲノム医療は、患者個々の遺伝情報を基として、そのがんの原因遺伝子を調べることで、病気の診断や治療などに活かすことができ、効果が高く副作用の少ない治療の実現が期待されています。

本院において、現段階では「がんゲノム医療連携病院」の要件を

満たす最低限の体制は整えていますが、今後、更に進歩していくゲノム医療の対応には、各診療科との連携や病院全体の組織体制の整備が不可欠であることから、今後検討していくこととしております。

患者さんが望むがんゲノム医療をスムーズに提供できるよう、皆様方のご協力をよろしくお願いいたします。(医事課)

各診療科等の紹介

【呼吸器外科】

呼吸器外科は胸部心臓血管外科学講座の診療部門として、附属病院での外来、入院を担当しています。対象疾患は、呼吸器疾患や縦隔疾患、胸壁疾患など全般に渡り、増加の一途をたどる各疾患に対して外科治療を行っています。具体的には、肺癌や転移性肺腫瘍(大腸癌などの肺転移)など悪性肺腫瘍、自然気胸や気腫性肺嚢胞、良性肺腫瘍、肺分画症など先天性疾患、肺結核や非結核性抗酸菌症、

肺炎腫瘍、膿胸などの炎症性疾患、胸腺腫や胸腺癌などの縦隔腫瘍、重症筋無力症、漏斗胸、悪性胸膜中皮腫、胸壁腫瘍など幅広く多岐に及んでおり、これらに対する手術を精力的に行っています。

とくに肺癌は、呼吸器外科手術



の半数以上を占める重要疾患ですが、呼吸器内科や放射線科、病理診断科と綿密に連携して良好な結果が患者さんにもたらされるよう努力しています。各診療科とは、以前から呼吸器カンファレンスを行ってきましたが、このポリシーは現在のがんボードにも反映されており、治療成績の向上を図っています。

専門外来は、毎週火曜日に新患と再来を受付しており、いずれも予約制をとって、増え続ける患者さんに対して十分に対応できるよう努めています。入院はすべて第一病棟5階で、ほとんどの症例にクリティカルパスを適用しています。近年は、胸腔鏡下手術を多用していると自負していますが、さらなる工夫で一層の短縮も実現可能かと考えています。2017年は、過去最高の年間166例の全身麻酔手術を実施しており、肺癌に対する手術も100例以上を数え、麻酔科ならびに手術部、放射線部、病理部のご協力に感謝しています。スタッフは3人の呼吸器外科専門医と後期研修の心臓血管外科修練医、消化器外科修練医でフル稼働しており、慢性的な人手不足が何とか解消できるよう努力している現状です。最後に、7月28日、日本肺癌学会・日本呼吸器内視鏡学会の東北支部会を弘前文化センターで開催しますので、この欄を借りて宣伝させていただきます。

(高度救命救急センター 伊藤勝博)

(呼吸器外科 對馬敬夫)

原子力災害医療派遣チームに係る専門研修を開催



ネットワーク構築を行っています。原子力施設の設置・隣接する県は原子力災害拠点病院の指定を行わなくてはならず、原子力災害医療派遣チームの整備が施設要件となっています。青森県は原子力災害医療派遣チームを

新体制以前に整備し、青森県立中央病院は全国で最初に災害拠点病院の指定を受けています。

宮城県の原子力災害医療派遣チーム整備を目的に、平成30年3月17日、小名浜原子力発電所に近接する石巻赤十字病院にて原

子力災害医療派遣チームを契機に、原子力災害に対する医療体制が大きく改良されました。ご存じの方も多いと思いますが、弘前大学は原子力災害医療・総合支援センターに指定され、青森県・北海道・宮城県の人材育成及び

平成30年度体制スタート！

今年度は、副院長に小児科学講座 伊藤悦朗教授、泌尿器科学講座 大山力教授、病院長補佐に総合診療医学講座 加藤博之教授、内分泌代謝内科学講座 大門眞教授、整形外科科学講座 石橋恭之教授、看護部 小林朱実看護部長に加え、麻酔科学講座 廣田和美教授が病院長補佐に就任しました。



副院長
伊藤 悦朗
小児科学講座
教授



副院長
大山 力
泌尿器科学講座
教授



病院長補佐
加藤 博之
総合診療医学講座
教授



病院長補佐
大門 眞
内分泌代謝内科学講座
教授



病院長補佐
廣田 和美
麻酔科学講座
教授



病院長補佐
石橋 恭之
整形外科科学講座
教授



病院長補佐
小林 朱実
看護部長

今年3月に東京大学伊藤国際学術研究センターで、JSPS学術システムセンター医歯薬専門研究班による「百寿社会の展望」シンポジウムが開催され、百寿社会の現状と展望が、医療関係者、厚生労働省関係者、AI等の先端技術分野のエキスパート達によって論じられました。現在、我が国の平均寿命は、男性約81歳、女性約87歳であり、最近の人口動態調査では、2007年生まれの子供の寿命中央値は107歳との予測が出ており、百寿社会はすぐそこ

まで来ていることを実感しました。その一方で、健康寿命は男性で約72歳、女性で約75歳と、平均寿命と健康寿命との差は、男性約9年、女性約12年あり、健康上問題のある期間が人生の最後に10年近く有ることもわかりました。特に認知症の発症率は、65歳以上の高齢者全体で17~18%、85~89歳で約40%、90歳以上では約60%、更には百寿者では60~70%と推計がでており、人生を謳歌して幸せに長生き出来るという訳ではないわ

先憂後楽

百寿社会



病院長補佐 廣田和美

けです。ではどうすれば良いのか？キーワードは先制医学でした。これは、集団を対象とした従来の予防医学ではなく、個々を対象としたゲノム並びに生活環境から解析しテーラーメイド的に予防策を取る方法でした。私の専門である周術期管理医学領域においても、ある意味先制医学とも言えるPrehabilitationつまり術前に個々に応じた運動を処方し、出来るだけ運動をして貰って手術に臨ませるという方法が近年注目を集めています。このPrehabilitation

により、高齢者の術後認知機能低下・せん妄の予防や在院日数短縮を図れるとの報告が多数出ています。我々医療従事者は、現在は患者さんの治療やケアに没頭する毎日を送っていますが、医学部附属病院である以上、単に既定の診療をするだけでなく、高齢者の皆さんに病気にならず如何に健康で幸せな人生を送って貰えるかを臨床・基礎両面から研究し、その成果を社会に還元する努力も必要ではないかと考える今日この頃です。

平成29年度ベスト研修医賞選考会開催

平成29年度弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞選考会が、平成30年3月1日、医学研究科臨床小講義室で開催されました。本賞は平成16年度の卒後臨床研修必修化に合わせて創設された賞であり、今回で14回目を迎えます。当日は、古川和仁先生、後藤慎太郎先生、反町悠也先生、萩原悠介先生(五十音順)の4名の研修医が、「ここがポイント! 研修医の心がけ」と題し、自分が研修生活の中で重視してきた事柄について、一人8分間ずつスピーチを行いました。聴衆は学生および教職員で、スピーチのあと参加した学生諸君による投票が行われました。投票の結果、萩原先生が平成29年度ベスト研修医に選ばれました。引き続き表彰式が行われ、萩原先生に賞状、トロフィー、記念品が贈られました。その他にも各種特別賞として、萩原先生に「ベストパートナー賞」、後藤先生に「レポート大賞」、反町先生に「セミナー賞」、古川先生と藤岡彩夏先生に「グッドレスポンス賞」が贈られました。つづいて懇親会



福田病院長、若林医学研究科長と共に、ベスト研修医賞、各種特別賞の先生方。

に移り、5年生から恒例となった「ベスト指導医賞」の発表が本年も行われ、会場は大いに盛り上がりました。当日は25名の学生諸君に加え教職員も含め総勢50名以上の参加があり、教職員、研修医、学生がみな、この1年の研修や臨床実習の思い出について心ゆ

くまで語り合い盛会裏に終了しました。医師は「人と人の絆」の中でしか育ちませんが、本賞がこれからも、研修医・教職員・学生の絆を強める役割を果たしてくれることを期待しています。

(卒後臨床研修センター長 加藤博之)

がんセンターのウェブサイトを開発



がんセンター(CancerBoard)とは、がん患者さん1人1人の状態に応じて、最も適切な治療を提供することを目的とした医療機関内で開催される症例検討会のことです。複数科の医師とがん医療に携わる専門職が職種を越えて一堂に集まり、個々のがん患者さんの症状や状態さらには患者さんの気持ちを共有して専門的意見を出し合い、治療方針を検討するため、その患者さんにとっての最良の医療を提供できるようになります。

がん診療連携拠点病院の指定要件として、がんセンターの設置および定期的開催(月1回以上)が位置づけられています。地域がん診療連携拠点病院の指定を受けている本院でも、がんに関わる全ての診療科に協力いただき、平成27年3月から本格的に開始しました。できるだけ多くの患者さんにメリットをだせるように、かつ現場の医療者にも煩雑にならないように、開催は毎週2回(月、木曜日)と頻回にし、申し込みも電子カルテで診療のその場でできるような簡便にしました。放射線科(診断および治療)医師と腫瘍内科医師は全日程で参加し、さらに患者さんの治療方針に関わるすべての診療科が参加できるように、症例ごとに細かく時間が設定されます。必要に応じて緩和ケアチームや医師以外のメディカルスタッフにも検討に加わってもらっています。また、医療者

や研修している学生であればなたでも参加自由であり、それぞれの教育の場にもなっています。開始当初は治療方針のみを取り扱うCancer Treatment Boardになっていましたが、最近は病理医の先生方にもご協力頂き、診断に困った症例の検討も行っています。このように患者さんにも医療者にもメリットがあるがんセンターボードを、県内のみならず全国に

周知したいという思いでがんセンター専用のウェブサイトを開発しました。他病院からの視察も受け入れています。詳細は「弘前大学医学部附属病院がんセンターボード <http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/~cancerboard/>」をご覧ください。幸いです。

(腫瘍センター 佐藤 温、八木橋真子)



事業継続計画(BCP)に係る講演会を開催

平成30年3月8日に事業継続計画(BCP)に係る講演会が開催されました。

事業継続計画(BCP)とは、大地震等の自然災害など不測の事態が発生しても事業を中断させない、または中断しても可能な限り

短い期間で復旧させるための計画であり、本院が青森県より指定を受けている基幹災害拠点病院では、指定要件の一部改正により、平成31年3月までに事業継続計画(BCP)を整備することが要件とされました。



この人 No.8

本院の多方面で働くスタッフを紹介いたします。

院内保安員
奈良 隆輝 さん

医療機関での医療従事者等に対する患者さんやその家族による暴言・暴力が社会問題となり、本院においても平成27年4月に警察官OBである保安員を採用し、丸3年が経ちました。

これまで、診察室等で大声をあげる、診療に納得いかないと診察室から出ない、病院への過度の要求などのいわゆるモンスターペイシェントへの対応だけでなく、院内を巡回しての防犯対策や院内で発生した盗難事件など、警察と関わる部分を迅速かつ円滑に対応するなど、保安員は無くしてはならない大きな存在となりました。

初代保安員であった建部さんが3月末で退職となり、この4月に奈良隆輝さんが新たに配置されました。毎朝、玄関側の総合案内で患者さんの対応をしておりますが、3月までと違う方がいると思われる方も多いのではないのでしょうか。

奈良さんは、この3月まで青森県警で30年以上に渡り生活安全部門に従事し、これまで、悪徳詐欺、DV・ストーカー、覚醒剤等の薬物捜査、少年犯罪、拳銃犯罪、サイバーパトロール等幅広い分野で活躍されてきました。

これからも先生方及び医療従事者の皆さんが安心して診療等にたれるよう、これまでの経験をフルに活かし、活躍していただきたいと思っています。

(医事課課長補佐 奈良正裕)

〈奈良隆輝さんから一言〉

4月に院内保安員の辞令を受け勤務しております。早く病院の雰囲気に慣れることはもちろん、職員の皆様にも早く顔を覚えていただき、様々な案件に対してすぐに対応出来るよう頑張りますので、宜しくお願いいたします。

看護の日

5月12日は「看護の日」です。

近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなみ、1990年に制定されました。日本看護協会の今年のメインテーマは『生きるを、ともに、つくる』です。5月6日から5月12日までを看護週間とし、全国各地で、看護についてのフォーラムや看護体験イベントが執り行われました。

本院看護部でも継続して取り組みを行っており、正面玄関中央待合ホールに看護の日のお花を展示しています。今年のテーマは「ハワイアンリゾート」でした。優しい匂いに誘われて近づいてみると、鮮やかな色彩と存在感あるお花に、力強さと情熱・躍動感を感じ、リゾートに行きたい気分となりました。また入院中の患者さんには、受け持ち看護師が心を込めてメッセージカードを作成しお渡ししました。メッセージカードも毎年看護師のデザインによるもの



で、今年は男性看護師作による可憐な桜が描かれていました。受け取った患者さんからの感謝の言葉を励みに、私達も元気を頂きました。少子・超高齢化・医療費削減・在宅医療の増加により、病院から在宅へとリレーされてきており、医療と介護の連携環境の整備と強化が急務とされています。

看護部の理念である「やさしさと思いやり」を持ち、患者さんに寄り添い、病院からの次のステージを考えながら、行き届いた看護を提供していきたいと思えます。

(第一病棟4階 山本葉子)

【編集後記】

南塘だより第90号をお届けいたします。ご多忙のところ、原稿をお寄せいただいた皆様には、心より感謝申し上げます。

本年度からいよいよ本格的に新専門医制度が始まり、各科とも多くの専攻医の先生方が来られ、または戻られているかと思えます。院内各部署含めて、新人の皆様も徐々に慣れてきた頃かと存じます。受け入れる側の皆様も含めて、あらたな環境や状況に慣れ切らず、ペースが掴めないまま心身の不調を生じている方はおられませんでしょうか。気持ちや体力にある程度はゆとりがないと、よい仕事はできません。しっかりと気分転換や休息をとりながら仕事をこなしたいものです。(病院広報委員 富田 哲)